

* 卯酉儀ドーム改装前の写真発見

卯酉儀室は大正13年(1924年)6月30日に竣工している。アーカイブ室新聞第135号(2009年2月16日)に「彗星搜索鏡が設置されていたドームは卯酉儀ドームか?」という記事を書いた。彗星搜索鏡は昭和2年(1927年)に購入され、彗星搜索鏡の写真が天文月報の1928年(昭和3年)1月号に載っている(写真1)。

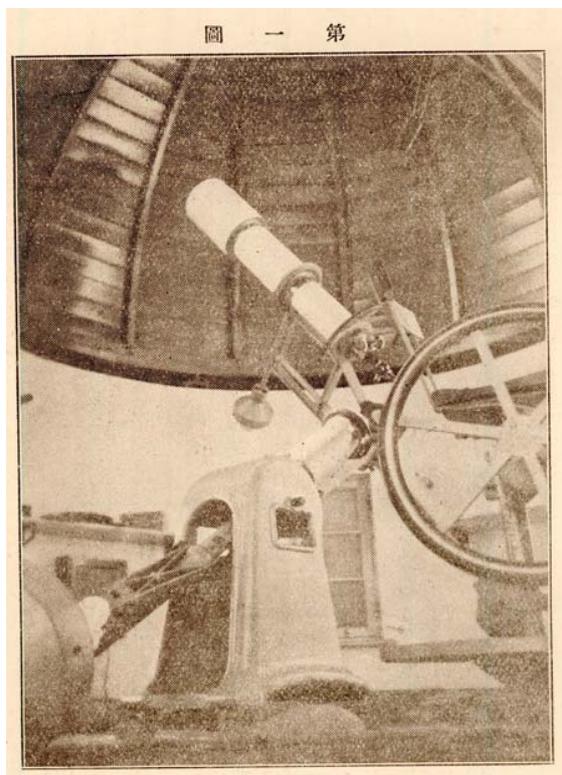


写真1 天文月報1928年1月号の写真

この写真1から、彗星搜索鏡は、卯酉儀室に設置されていたことが判明した。この写真では、当時の卯酉儀室のドームの形状がどうであったかは分からない。しかし、スリット開閉用の取っ手の形状は筆者がこの卯酉儀ドームを使っていた時のものであった。卯酉儀室完成が大正13年(1924年)、彗星搜索鏡購入が昭和2年(1927年)であるから、卯酉儀室に卯酉儀という望遠鏡が設置されていたとは考えにくい。東京天文台75年史によれば、当時90mmバンベルヒ子午儀が3台記載されており、そのうち2台は聯合子午儀室1、2号室に設置されていたから、3台目の子午儀が卯酉線上の観測のために90度方向を変え、高度軸を南北にして設置されていた可能性はあるが、現在3台目の90mmバンベルヒ子午儀の存在は確かめられていない。卯酉儀という望遠鏡を見た人はいないのである。

この度、日江井栄二郎名誉教授の仲立ちで、レプソルド子午儀を用いて精力的に観測をされていた辻光之助氏のご子息から辻光之助氏の写真を多数提供いただいた。その中に、びっくりする写真を発見したのである。その写真が側壁のタイルの形状、窓の形状、入り口の形状から卯酉儀室であることははっきりしているのだが、そのドームで長年観測をしていた筆者の知るドームとはスリットの形状が違うのである。筆者が卯酉儀と呼ばれていた30cm反射望遠鏡で3色光電測光をやっていたときのドームは写真2のようであった。すでにかなり朽ち果てたとしており、写真2は平成2年(1990年)10月31日の朝日新聞に掲載されたものであるが、東京天文台が三鷹天文台となっており、「侘び寂び」を訴えるドームとして取り上げられ、東京天文台にある一番小さなドームとして紹介されている。筆者

写真3のドームの前に写っているのは、辻光之助氏のご家族であろう。左端の人が辻光之助氏である。写真3のドームはスリットが1/4球（普通90度ではなく100度くらいだが）ではなく、半球にわたってスリットがあることが分かる。筆者が使っていた卯酉儀ドームには30cm反射望遠鏡が入っていたから、100度程度のスリットに改造されていたが、改造前の卯酉儀室は卯酉線上を通過する星の時刻と高度を観測するのであるから、子午環ドームのように半球にわたってスリットが必要である。そして写真3にはそのようなスリットが写っているのである。

卯酉儀室がなぜ子午環室のように南北に開くスリットをもった形状をせず、丸いドームなのかは理解に苦しむが、初めから丸いドームであったことは写真1からも明らかである。接眼部が不動点にあった彗星搜索鏡での観測には、このスリットは好都合であったと思われる。ドームを回す手間がずいぶん少なくてすんだはずである。

彗星搜索鏡が、昭和10年に建てられた彗星搜索教室に移った後、卯酉儀室は何時の時点で改装されたかはまだ分からない。大沢清輝先生が光電測光を始めた頃には、ドームは手動から電動のモーター駆動に変えられていた。その工事の際、ドームの屋根構造が改装されたと考えるのが相当であるが、現時点でははっきりしない。

このように、アーカイブ室の仕事を始めて、いろいろ興味深いことに出くわしている。